

那木加甫

1. 事業実施の目的 博士論文を作成のための資料収集
2. 実施場所 中国北京
3. 実施期日 平成 30 年 8 月 20 日 (月曜日) から 8 月 27 日 (月曜日)
4. 成果報告

#### ●事業の概要

本調査は申請者の博士後期課程学位論文を作成するための文献資料の収集であり、調査の段階としては補足調査にあたる。本研究の目的は、中国、ロシア、モンゴル国などの国々において、少数派集団として生き残ってきたオイラド・モンゴルの宗教復興のあり方を明らかにすることである。

オイラド・モンゴルは、中国内蒙古自治区のモンゴル族やモンゴル国の主要な民族であるハルハ・モンゴルとは系統が異なるグループの人びとである。彼らの祖先は、15 世紀にモンゴル高原を含む北アジアを広く席卷し、17～18 世紀にはジュンガル汗国を形成して、帝政ロシア、清朝と互角に対峙した。18 世紀半ばにジュンガル汗国が清朝によって滅ぼされると、オイラド・モンゴルは清朝と帝政ロシアに統合された。その後、彼らの子孫はロシアのカルムイク共和国から中国東北の大興安嶺まで離散することとなり、現在は新たに形成された近代的国民国家である中国、ロシア、モンゴル国に分断されている。現在、オイラド・モンゴルの総人口は約 70 万人と推定されており、その内、中国に約 30 万人、ロシアに約 20 万人、モンゴル国に約 20 万人がそれぞれ分布する。それぞれの地域に暮らすオイラド・モンゴルは少数派であり、多数派のロシア人やハルハ・モンゴル、漢民族などに同化される傾向にある。また、各地域に分散するオイラド・モンゴルは、チベット仏教を信仰することや各地域において少数派であるということなどで共通している。これまでの中国新疆のホボクサイルとロシアのカルムイクにおける調査・研究は、両地域における代表的な寺院である、カルムイクの開祖金寺とホボクサイルの王旗寺を拠点として実施し、以下のことを明らかにした。

新疆ホボクサイルにおいては、新疆オイラド・モンゴル社会における宗教指導者のシャリワン・ゲゲン 14 世と彼の座所であるホボクサイルの王旗寺を対象に考察してきた。それによって、第一に 1980 年代以降、中国の民族政策の緩和に伴って見られた各民族の文化復興や民族アイデンティティの高揚などの潮流のなか、シャリワン・ゲゲン 14 世は単なる宗教指導者から新疆オイラド・モンゴルの民族指導者へと移行してきたこと、第二にシャリワン・ゲゲンはチベット仏教界の伝統に沿って、寺院に活仏として崇拝されていると同時に、

各寺院の社会的、経済的基盤が再構築される過程に欠かせない要素として新たな意味で位置づけられていること、第三には、中国における民族政策の緩和によって仏教寺院が再建される過程及び今日のオワート寺における宗教実践の実態などを解明した。

一方、カルムイクにおける調査・研究は、首都エリスタにある開祖金寺を拠点として実施してきた。開祖金寺は今日ヨーロッパにおける最大の仏教寺院であるといわれており、2005年にカルムイク政府が主体となって建設した。その背景には、1980年代中期にソ連が国内で施行したペレストロイカ政策による民族政策の緩和と1991年のソ連の解体による社会主義政権の終結があった。こうした影響をうけてソ連の政治的影響下に置かれてきた旧社会主義圏においては、民族の伝統的文化の復興を主とする各民族のアイデンティティ復興が高揚してゆく。こうした時代背景のもとで建設された開祖金寺は今日どのような宗教的、社会的活動を行なっているのかに焦点をあてた。調査を通して、当寺院の建設費用の出所を含む建設過程、僧侶の教育システム、寺院の管理体制や主な収入源、仏像の構成や招来の概要、座の配置、供物・金銭の管理や分配、法要の日程と内容、巡礼者や協力者の概要を含む基本的な状況を把握することができた。そのうえで、当寺院が主体的に創設したB慈善団体の活動に関して考察を深めた。

今回の調査は中国北京において実施し、オイラド・モンゴルに関する文献資料を多く所蔵している中央民族大学図書館と中国人民大学図書館にて文献資料を複写した他は、中国民族出版社から一部の最新の研究関連の書籍を購入した。具体的に言えば、『南路旧土尔扈特茶騰旗胡参庫熱：喇嘛廟歴史説明（モンゴル文）』（2014年出版）、『新疆蒙古藏伝佛教寺廟（漢文）』（2014年出版）、『新疆蒙古族民間信仰与社会田野調査』（2014年出版）、『近現代新疆蒙古族社会史（漢文）』（2015年出版）などをはじめとする2010年代以降に出版され、日本の何れの大学図書館に未だに所蔵されていない30冊近く、最新の研究関連の書籍を入手（複写と購入）することができた。

#### ●本事業の実施によって得られた成果

本事業の実施によって、新疆オイラド・モンゴルの宗教信仰に関する研究は文献史料を中心に使用する歴史研究が主流であることが分った。それに比べて現地調査に基づく文化人類学的研究に非常に少なく、少数派としてのオイラド・モンゴルの宗教信仰のありかたを解明しようとする報告者の研究を新しい研究の動向で位置づけることができた。

#### ●本事業について

貴重な調査機会を頂きありがとうございます。